| 区分・種別 | 国宝(工芸品) | | |
|---|---|---|---|
| 名　　称 | 大太刀(おおだち)　　銘　貞治五年丙午千手院長吉 | | |
| 所　在　地 | 今治市大三島町宮浦 | | |
| 所　有　者 | 大山祇神社 | 管 理 団 体 | |
| 指定年月日 | 明治44年4月17日　国　　昭和28年3月31日　国宝 | | |

**解　　説**

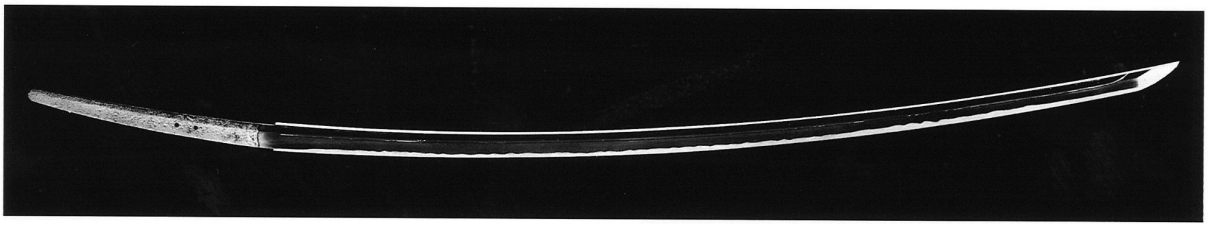
大太刀は、刃長136cm、反(そ)り4．8cm、元幅4．1cm、先幅3．2cm、切先長6．8cmである。鎬造(しのぎづくり)、庵棟(いおりむね)、身幅が広く、反り高く、腰にふん張りがある。先は大鋒(きっさき)である。

鍛(きた)えは大板目で渦巻き状につみ、腰元には二重に棒映(うつ)りが通っている。刃文はのたれごころの乱れ刃で小足がにぎやかに入り、小沸(こにえ)出来で刃縁はほつれ砂流しがかかっている。帽子の刃は乱れ込み、先はとがってやや深く返っている。

彫物は表裏に樋(ひ)先の下った棒樋と連れ樋を彫り、区(まち)際で丸に留めている。

茎(なかご)は生(う)ぶで長く、栗尻、鑢(やすり)目は勝手下り、目釘(めくぎ)穴2個である。佩(はき)裏の中央に「貞治五年丙午千手院長吉」の銘を1行に刻している。

大太刀は鎌倉時代末から南北朝時代にかけて流行したが、これはその一典型で、貞治5年（1366）はちょうどその盛期にあたる。

作者の長吉は千手院派（奈良東大寺の千手院谷に居住した刀工団）の刀工であるが、遺作はほとんど知られていない。銘を佩裏にきる手法は、室町時代以降に大流行をきわめる打(うち)刀が皆これであり、それの先駆といえる。

社伝によれば後村上天皇の奉納品といわれている。